

前々任地の教会、田名部教会は青森県のむつ市にある創立百年余を経た教会でした。むつ市といえは下北半島の観光の要衝ですが、ヤマセ（オホーツクの寒気団）の問題は未だに日々、深刻です。毎年お米の穂が出る六月頃になるとヤマセが来るとか来ないとか、そんな話題が日常的に交わされます。このヤマセが一带に吹くと、急激に気温が下がり、お米など農作物に冷害をもたらすのです。例えば、弘前の気温が25度なのに下北半島は17度というほどなのです。お茶のみ話で聞いたことですが、下北半島のどこかに「カラスばあさん」と呼ばれる方が、どつとも話から察するに霊媒師のような方ですが、毎年農繁期に入る前にお天気の長期予報、筆書きで書き記したものを発行するというのです。ヤマセが来る予感が走ると北東の空、年中晴れ間のないどんよりとした空に向かって「このヤマセめえ〜が」と叫ぶらしいのです。ヤマセを恐れるこの地域の人たちには、辛い歴史があります。1930年（昭和5）年の大冷害ではこどもたちや若い女性たちが売られていきました。こういう経験を経験して刻んだ故か、イタコの習俗のようにカミとか信仰の篤い文化を育んできた地域、人々だということ、郷愁をとまなつて思い出します。そして、このように辛い経験してきたひとたちのうちには、人を見る目が培われ、人間の力、人間が誇る希望の愚かさをよく知る人たちが多いのです。

▼弟子たちの幻想、その崩壊

「この人なら確かだ」と確信し、イエスに従った弟子たちも、取り返しつかない後悔、悲嘆をとまなつて今やそのことを熟知する者となりました。人間としての希望

をイエスに投影し、誤解しながら旅をし、絶望に行き着いたのです。もしも彼らがはじめから十字架の死を知らされていたなら、「わたしに従いなさい」という、あの呼びかけなど即座に断っていたことでしょう。

そして今や、敵に取り囲まれているのです。彼らは絶望と恐れにおののき、その心もまた扉を閉ざしているのです。

しかしながらここに来て、弟子たちの恐れは、喜びに変えられました。当初、彼らが恐れる原因は、敵対する相手の脅威によるものと見えたのです。しかしそこに、イエスが現れ、真ん中に立たれました。そして、「平和があるように」という言葉を発せられ、「手と脇腹（傷跡）を見せた（19節）」ことにより、弟子たちの心に変化が起きたのです。

つまり彼らにとつての真の問題、その一は、恐ろしい敵ではなかったのです。そうではなく、イエスが不在のままであったことだったのです。

その二は、イエスの手と脇腹にある傷をとおして向き合うことを避けていたことでした。このイエスの手と脇腹の傷は、弟子たちの誤解、幻想がもたらしたものでした。決して直視したくない傷、自らの愚かさを隠しようもなく現わす傷跡なのです。彼らが直視できないことを知っておられたイエスは、直前に「あなた方に平和があるように」と和解の手を差し伸べて、弟子たちを自身に立ち帰るように促されました。恐れのない備えをもって、ご自分が負われた十字架、目を背けたい、記憶から消し去ってしまいたい傷跡を直視するように促し、求めるのです。

自責の念を捨て去ることができた弟子たちは、意を決して、警戒心、防衛を廃して傷、幻想の楽園、その愚か

さがイエスを十字架につけてしまった自らの負い目を見つめるのです。

そのとき、虚像であった敵に対する恐れは崩れ去り、喜びに充たされたのです。人間の幻想、その虚偽、絶望が、神の現実、真実、希望に変えられていくのです。

▼メルケル首相の言葉から

メルケルさんは米国の卒業講演に招かれて、ヘルマン・ヘッセの言葉「すべての物事のはじまりには不思議な力が宿っている」の引用から始めるのです。

講演の半ばで、東ドイツ科学アカデミーの物理学者時代を回想し、「…私の住居は、ベルリンの壁のすぐ近くでした。毎日、研究所での仕事が終わって徒歩で帰宅する道の先に、ベルリンの壁がありました。壁の向こうにあるのは西ドイツ、つまり自由でした。毎日、私は壁のすぐそばに行きますが、最後に折り返して、アパートに帰宅しなくてはなりません。日常の終わりに、自由から歩み去らなければならなかったのです。『もう限界だ』と何度感じたかはわかりません。さまざまの閉塞感でした。…」
(<https://logmi.jp/business/articles/321396>)

▼むすび

物事のはじまりに想像を遙かに超える不思議な出来事があります。わたしたちの中心にイエスが現れ、立たれる、差し出してくださった「平和」のうちに、直視することができなかつた過去の傷跡を見る、わたしたちの恐れが喜びに変えられる、わたしたちの幻想、虚偽、絶望が、神の現実、真実、希望に変えられていく、今、わたしたちは恐れから解放され、喜びに充たされて、自らの復活の物語のはじまりを迎えたのです。和解を経験した者として、和解を実現する務めを帯びて、いまここから派遣されるのです。